

突然ですが、クイズです！

「豊臣秀次は本当に、謀反を企てたのか、それとも秀吉の謀略だったのか？」

という問題です。

映画「関ヶ原」の冒頭のシーンは衝撃的でした。穴を掘った中に次々と秀次公の一族が切り捨てられて放り込まれるなか、駒姫の侍女（有村架純）が奮闘する場面は印象的でした。刑場には秀次公の首も晒されていたように思います。

文禄四年(1595年)7月15日は、豊臣秀吉の後継者になるはずだった豊臣秀次の命日です。近江八幡市の八幡山の村雲御所瑞龍寺において法要実行委員会では、毎年命日の日に顕彰法要を行なっています。関白の地位にいた秀次が、どうして切腹なんて悲劇の最期を迎えてしまうことになったのか？直接的な原因が未だハッキリせず、新説なども提唱されたりしておりますが、ここは通説に従いつつ、その歴史を振り返ってみましょう。

秀吉が拾かわいさに処断したという大筋のストーリーだけではなかなか説明がつきにくい部分です。大河ドラマの『真田丸』で三谷幸喜が描いたのは、秀頼誕生によって叔父から疎まれていたのではないかという疑心暗鬼にかられて、鬱になって自ら自殺するというものですが、実際、秀頼誕生直後、秀次は喘息治療で熱海へ湯治に行くのですが、秀頼のことで心が休まらず逆に悪化したようです。大河でも描かれた「謹慎中に秀次が勝手に自害し面目をつぶされた秀吉が激怒した」というストーリーは、その分かりづらさを再考証したものだと思います。 いずれにせよ拾誕生で疑心暗鬼が生じていたことは確かなのでしょう。しかし、この理由だけではその後、女・子供含めた親族や家臣を50人近くまで処刑したり賜死させたことにつなげるには無理があります。秀次が勝手に自害したならそこまで残酷な仕打ちをするでしょうか。さらに聚楽第や八幡城まで破壊するほど秀次の痕跡を消し去ろうとするでしょうか。殺生関白の悪行や謀反というのは今や否定的になりつつありますが（そもそも謀反を記した史料は無いといえます）、個人的には秀吉との確執に加えて秀頼の将来を確保するための複合的な理由が原因ではないかと考えます。そこを検証したいと思います。関白豊臣秀次肅清は明らかに豊臣家にとっては失政だと思うのですが、大河でも取り入れられた学者（矢部健太郎氏）の説『秀吉に秀次を殺すつもりはなく、早まった秀次が自ら命を絶った』さらに「秀吉が秀次の妻妾子女をすべて殺したのは、勝手に死んでしまった秀次への怒りがそうさせた」と説明している。しかしながら、秀吉が秀次を殺すことを命じたことは隠しようのない事実であります。次の客観的な証拠（資料）がそれを示しています。秀次が秀吉の命令で急に紀伊国高野山に上ると、その長ともいえる木喰常人は驚いて

秀次の不幸に涙したと言います。そして秀次に出家して法体の姿になるよう促し、『当山の宗徒が一同で太閤殿下に訴えれば、どれほど憤りが深くてもあなたを殺すことはないでしょう』と慰めたそうです。これに素直に応じた秀次は、従者たちとともに頭を丸めたのです。ところが秀吉は福島正則や福原長堯らを大将として 1 万の兵を高野山に派遣し、その日のうちに自害を迫っているのです。もし秀吉が秀次が出家さえすれば命を助けるつもりだったという矢部氏の新説が正しいとすれば、わざわざこれほどの警戒（大軍出兵）をする必要などなかったはずですが、秀次の自害の様子があまにも神妙だったゆえの新説かもしれませんが、これは自分は何一つ悪いこと（秀吉への謀反）はしていないということを示すための、秀次の精一杯の意地だったのだと思います。そして何よりも秀吉が秀次の妻妾子女 30 人以上を無残に殺したことの説明には、これだけでは論理的に相当無理があるように思います。

詳しく史料を調べると、あまり語られていないエピソードがちらほら見つかります。人々があまり語り継がなかったのか、ドラマや映画のストーリーに合わなかったのか、深い事情はわかりません。ここから先は、そのエピソードが「真実」とは言い切れず、あくまで「仮説」になりますが、「隠れたエピソードをつないでいくと、こんな考え方もできる」と思って読んでください。

まず、秀頼が生まれて間もなく書かれた「太閤書信」にあまり語られていない記述があります。一部を抜粋してご紹介しましょう。

かえすかえす、ひろいにちち（乳）をよくよくのませ候て、ひとね候へく候。ちちたり候やう、めしをもまいり候へく候。すこしももの（物）きにか（懸）け候ましく候。以上。

たかのとり（鷹の鳥）五つ・みかん（蜜柑）のひけこ（髯籠）三つ進之候。

一日は文給候。返事申候はんとところに、いそかわしき事候て、返事不申候。おひろい（拾）なをなをけなけ（健気）に候や。ちちもまいり候や。やかても参申候はんか、きうめい（糾明）をいたし候て、参可申候。そなたへわかみ（我身）こし候は、かうはら（業腹）た（立）ち候はんま、まつ／＼こなたにてききとけ候て、すまし候て参可申候。かしく。

廿五日

ふしみより

おちゃちゃ

大かう（大橋文書「太閤書信」より抜粋）

この書信は、以下のように訳されます。

（返し書）くれぐれも拾に乳をよく飲ませ、怠りなく養育に努めてください。乳が足りるように、あなたもしっかりと食事をしてください。あなたは何も心配する必要はありません。鷹の鳥五つと髯籠入りの蜜柑を三つお送りします。一日に文をいただきました。すぐ返事しようと思っていたのですが、多忙ゆえに返事ができませんでした。お拾はますます元気ですか。乳もよく飲んでいますか。すぐにでも会いに行きたいのですが、不祥事の糾明を終わらせてから参ろうと思います。非常に腹が立っているので、今そちらへ行ってしまうといけないので、まずはこちらで詳細を聞き届けた上で処罰を済ませ、そちらへ参ります。

二十五日

お茶々

伏見より

太閤

この書信は文禄2年（1593年）10月に出された豊臣秀吉音信（大橋文書『太閤書信』）からの抜粋です。2カ月前の8月、秀頼が生まれたことを知って、朝鮮出兵の「文禄の役」から急ぎ帰った秀吉が、伏見城から茶々（淀殿）に出した手紙とされています。

ここに「非常に腹がたっている」とありますが、その後、大坂城にいた女房や僧侶を厳しく処罰したという記録が残っています。理由については、まったく書かれていません。どうやら、淀殿（茶々）がらみの秀吉に密告があり、それについて秀吉は非常に腹が立ってかなり厳しい処罰をしたようです。

何にそれほど腹が立ったのでしょうか。史料には、「金銭の不祥事や男女関係の乱れ」と書かれたものもありますが、そんなことで天下人の秀吉がこれほど立腹するのでしょうか。しかも秀吉みずから厳しい処罰を下しているのです。普通なら、側近の者に命じて対処する程度のことではないのでしょうか。……これらのことは、服部英雄著「河原ノ者・非人・秀吉」に詳しいので、私もそれに習い書きました。

また秀頼の子育てについて、普通なら乳母が行いますが、秀吉は淀殿がみずから行うように指示しています。なぜ、淀殿がみずから子育てしなければならなかったのでしょうか。淀殿は秀吉の子供を産めた唯一の女性です。子育てよりもさらなる懐妊を望むのが普通ではないのでしょうか。考えれば考えるほど、わからなくなってきます。

秀吉は、信長の血を引く世継ぎが欲しかった？　そこで、ひとつの仮説をたててみました。

秀吉がそれほど怒ったのは、“秀頼の出生の秘密”が明るみに出そうになったからではないでしょうか。その秘密とは……たとえば、「秀頼は秀吉が意図的につくった、実子ではない嫡男」と考えれば理解できます。つまり、今でいう「体外受精」のような考え方です。

もちろん、戦国時代にそんな技術はありませんが、「信長の血を引く跡継ぎをつくりたい」という考えはあったかもしれません。秀吉がそう考えていたと仮定すると、織田家の血を引く淀殿を側室に迎えて、理想的な子供をつくるにふさわしい男性を選んで、秀吉公認のもとで子供をつくらせたと考えれば、すべての辻つまが合います。

秀吉は天下人になっても、1人の子供にも恵まれませんでした。それはつまり男性的に欠陥（無精子症）があったということです。これは仮定ではありません。事実です、秀吉から離れた愛妾は別の男性に嫁し子を産んでいます。子が出来ない夫婦に子宝が授かるようにする方法は、民俗事例でいえば「参籠」があります。すなわち神仏に願掛けをして「通夜参籠（おこもり）」による宗教的陶醉の中でする男女の営みである。民衆にも最近まで盆踊りにおける男女の自由な交渉などの習俗がありました。

秀吉は自分に子種がないことを承知していた。淀殿も浅井・織田の血の子を伝える道を選択した。秀吉も淀殿（茶々）の産む子は豊臣の子であり織田の子であると共通認識していれば。現代の「非配偶者間受精」と割り切れればよい。鶴松、秀頼の二人の子のうち、少なくとも鶴松は、秀吉が承知したうえで、むしろ秀吉が指示し命令した結果、秀吉以外の種で淀殿に産ませた子である。しかし、秀頼の場合は事情が違っていた。秀吉は朝鮮出兵で九州にいた時に淀殿が秀吉の内諾を得ずに勝手に種付けをしたのである。それで上記の書簡となる。

「鶴松は太閤の子であるが、秀頼は淀殿の子として育てよ」と秀吉は云っている。(秀吉は妻あての手紙・太閤書簡にも、鶴松は自分たちの子であったが生まれた子・秀頼は茶々一人の子でよい。と・・・ここに後年の高台院が大阪城を去った理由があると見た。) 淀殿が2回目の「参籠」を行った原因は「鶴松の夭折」にある。何としても浅井・織田の子が欲しかった淀殿は、今度も秀吉は了解してくれると思ったのであろう。しかし、淀殿付きの女房侍女やそれに関わったと思われる陰陽師・声聞師がことごとく処罰(処刑)されるに及んで、淀殿も震え上がったことだろう。だが秀吉としては、否定はありえない。なぜならここで淀殿まで処罰すれば前回の「鶴松」のこともバレてしまうからである。そのためこの件に蓋をしようとしたのである。だから名を「拾」としたのである。ところが世間では不義の子という「うわさ」が立ってしまった。

「時慶記」によれば、10月26日に豊臣秀次は、聚楽第で行うはずだった公家を招待しての能を延期して、急遽27日に伏見にいた秀吉に会いに行っている。理由は何か。事実を問いたです為である。通説では、秀頼が生まれたことにより関白という立場が不安定になるため→反逆したことになる。しかし、明らかに実子でなく本来なら犯罪行為の結果の子として葬るべき子を後継者にした。そのことに秀次は強く主張し反発したのではないでしようか。秀次やその妻子・家族、家臣は出生の疑問が明白だったにも関わらず、自身の子だと主張した秀吉に対して激しい不信感を抱いた。→だが、秀吉の方針に根本的な疑問を持つことは許されなかった。秀次事件はこうして起こった。妻子が皆殺しにされたのは戦国の習わしとは言えない。秀次ひとりが犯罪人・謀反人だったからでなく関白(秀次)家の人たち全員が犯罪者だったからである。関白家が何かを叫ぼうとしても残虐刑の連続で不可能となる。関白家に仕えていた優秀・有名な武将たちまで切腹や処刑に追い込んだことに長いこと疑問に思っていたことが氷解した。口封じである。秀吉が自分の子であると云えば秀頼は秀吉の子なのだ。多くの大名はそれに従ったけれど、秀吉に近かければ近いほど、受け入れがたい感情が残った。後年の関ヶ原合戦では福島正則、加藤清正、浅野長政、木下勝俊それに小早川秀秋が東軍に加担した。高台院さえも大阪城秀頼とは距離を置いた。秀吉が臨終に際して異様なまでに大老に秀頼の後見を依頼したのも、実子でないことを大老たちは暗に承知していたからであるとみることができる。

ここで秀頼誕生前に戻って秀吉の心理を推論してみました。・・・・鶴松が2歳で夭折した。もう子はないと思っていた秀吉は、それで甥の秀次に継がせようとしたましたが、秀次はもともと「百姓の子」です。「百姓が天下人になる」ことが、どれだけ大変なことか秀吉が一番よく知っています。それなのに、甥というだけで後を継ぐ秀次に家康をはじめ強者ぞろいの武将たちが従うか。秀次にそれだけの求心力があるとはとても思えない……そう考えると、秀吉は不安で仕方なかったのではないでしようか。そこで、淀殿が織田信長の妹・お市の娘であることに目をつけ、信長の血を引く子を自分の嫡男にすれば、戦国武将たちの求心力を保てると考えたのではないでしようか。少なくとも鶴松の時はそう考えて実行したのです。ただ秀頼の時は淀殿が秀吉は承知するものと思って勝手に実施したのです。

以上、この仮説は400年前に封印されたものであるが、研究者にはよく知られた史料でもある。……ここから秀次事件を検証・再解釈してみました。表題のクイズの答えは分かりましたでしょうか？

ここで終わるつもりでしたが、補足で近江八幡とも関係のある秀吉の姉（智・日秀）についても瑞龍寺関連で記録しておきたいと思います。

豊臣秀吉の実姉である智（とも・日秀尼・1534～1625）という女性は、46歳で三男（秀次、秀勝、秀保）を産み、82歳で曾孫（御田姫＝隆清院）を守り抜き、92歳で亡くなった肉体的にも精神的にも非常に頑健な人でした。彼女は一番早く（織田信長と同年に誕生）生まれたにもかかわらず、一族すべての最期を見届けています。（晩年のみ記載します。）

- 57歳 旭（実妹）病死
- 58歳 豊臣秀長（実弟）病死
- 59歳 豊臣秀勝（次男）朝鮮で病死
- 59歳 仲（実母）病死
- 62歳 豊臣秀保（三男）秀吉が暗殺
- 62歳 豊臣秀次（長男）秀吉が殺害
- 65歳 豊臣秀吉（実弟）病死
- 79歳 三好吉房（夫）病死
- 82歳 豊臣秀頼（甥）大坂の陣で自害
- 82歳 菊（孫）大坂の陣で処刑
- 91歳 寧（義妹）病死

豊臣一族のすべてを見届けた凄まじい生涯だったわけですが、智がいたからこそ秀吉の血筋が今日まで繋がり、一族の数少ない記録も残されたのです。

三人の息子を実質的にすべて弟秀吉に殺された智は、京都に善正寺という秀次らの菩提寺を建立します。翌年になると彼女を気の毒に思った後陽成天皇から一千石を託され、智は瑞龍寺という格式高い門跡寺院の院主になります。病床を見舞うこともなかった憎い秀吉が死に、夫も死ぬと、智は弟秀長の家老だった藤堂高虎を介して、次男秀勝の娘である完子（さだこ・1592～1658）と面会するようになります。完子は関白九条家に嫁いで7人の子供を産んでいたため、今日まで豊臣の血筋を残した人でした。智は完子の末娘を瑞龍寺の後継者にもらい受けています（2代目門跡・日怡）から、親交は死ぬまで続いたのでしょう。

一方長男秀次の血筋ですが、21 歳になる秀次の娘（菊・1595～1615）がいた。彼女は秀次の妻、小督局（おごうのつぼね）の子で、小督の兄にあたる後藤六郎兵衛に育てられたのですが、彼女の夫が大坂の陣で豊臣秀頼に従ったため、智も庇いきれずに徳川方に探索され処刑されてしまいます。もう一人智の曾孫に当たる御田姫（1604～1635）＝直（なほ）＝顕性院という女性がおりました。彼女は秀次の娘（真田丸では「たか」＝幸村の3 番目の妻として岸井ゆきのが演じていた。＝隆清院）と真田信繁との間に五女として（秀次事件の前に幸村とたか＝隆清院は夫婦になっていると思われるが）生まれています。大坂の陣の時に 12 歳だった御田姫の方は、智が密かに匿い東北地方の武将岩城氏に嫁がせたため、無事に血筋を残しています。その子は三好（三好は秀次が八幡城主だったころ名乗っていた姓）幸信といい岩城家に仕えます。墓は秋田県由利本荘市岩城町の妙慶寺にあります。御田姫は死ぬまで智の菩提を弔ったそうですから、正に曾祖母を命の恩人と考えていたのでしょう。そして秀吉の正室だった寧（高台院）が 77 歳で死ぬと、さすがの智も悟ったのでしょう。翌年豊臣一族の弔いを完子の末娘に託して静かに死んでいます。

以上